紀　　要

第 3 号

目　　次

序
1．お米を作りだしたころ……(浜崎悟司・細川修平・奈良俊哉)
2．滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について……(吉田秀則)
3．手焙形土器雑想
　—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—……(小竹森直子)
4．三つの古墳の墳形と規模
　—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—
　……(用田政晴)
5．野洲川下流域の古代豪族の動向
　—近江古代豪族ノート4—……(大橋信弥)
6．満願寺廃寺出土瓦の産地……(三辻利一・北村大輔・北村圭弘)
7．信　楽　と　丹　波……(松澤　修)
8．人形茶碗・人形手茶碗
　—考古学的視座からのアプローチ—……(稲垣正宏)

1990．3

財団法人滋賀県文化財保護協会

8．人形茶碗・人形手茶碗
－考古学的視座からのアプローチ－

稲　垣　正　宏

1．はじめに

抹茶茶碗の中に人形手茶碗と称される中国製青磁碗がある。内面に人物文等がスタンプされる茶碗で、輸入青磁碗の中に占める割合は少ないが、伝世品・出土品の中に見ることができる。

李知宴氏[11]は、『人形(手)茶碗は、龍泉窯においても生産され、「山水人物歴史物語り」「二十四の孝行図」「孔子・顔回を泣く」等の物語りが、主に型押し（スタンプ）と露胎の浮き彫りで描かれており、釉の色調は褐色をおびた緑か、よもぎの緑に近い色、灰色がかった黄色を呈する。』と、している。

「論語をはじめとする哲学書」や「歴史書」の名場面が、陶磁器の壁面に描かれることは、中国の陶磁史上では初めてのことである。前野直彬氏[12]は、明時代の出版界の特徴として、『印刷技術の向上による大量印刷の実現、それに伴い通俗小説をもふくめて、おびただしい数の文学書の出版、そして、これらのことから一般人の間にも蔵書家が出現する。』などをあげている。

多様な書籍の刊行により、読書の習慣が広く普及すると人気のある本の名場面が人々の口の端に登るようになる。そこで、陶磁生産者の方でも売れ行きを考えて、これらの名場面をえがいた茶碗を生産したのだろう。

筆者の小さいころ怪獣映画やテレビの怪獣物が流行し、荒物屋の店頭には、ウルトラマンやゴジラの描かれた茶碗や湯飲が多く並んでいたことがある。これと同様の例であろう。

中国における人形(手)茶碗のみに限定した研究論文にはいまだ解逅していないが、日本では、数本の論文が書かれている。長谷部楽爾氏は、石川県波佐谷出土の中国製陶磁器の報告[13]の中で、出土品の人形茶碗について分析し、東南アジアの遺跡でも出土する例があることを記している。

亀井明徳氏も自著[14]の中で、波佐谷出土の人形茶碗について分析している。

西田宏子氏は、茶陶史における人形(手)茶碗の役わりについて、遺跡出土品と伝世品の両方を取り上げて論述[15]している。

近年、戦国期、織豊期の遺跡から何点かの人形(手)茶碗の出土が見られる。茶陶史・工芸史の研究に寄与するためにも、考古学的な視座からの研究論文として書いたのが、以下の小論である。

日　時（西暦）		客	如・室	座	茶器他	水指・建水	茶　碗	備　考
天正7年12月8日（1579年）	（昼）	横村平六左衛門・後座宗四	如・うはくち			手桶・釜ノハウノキヤ	人形茶碗	端面
天正8年3月22日（1580年）	（朝）	仙橋住尚	六畳ニフトン	香炉・香箱		いもがしら・釜のはそのさき	黒貝天目、目台、津茶人形茶碗	
天正8年4月24日（1580年）	（朝）	天王寺屋道叱・京茶屋道設・鉄屋宗都	人小板ニフトン		宗間ノ帳座・くつかた盆ニ	いもがしら	人形茶碗	
天正8年5月26日（1580年）	（朝）	小嶋や道繁・二葩	六畳・ウハロノ釜	色紙・かふらなし・鶴板ニあさかは生面		いもがしら・梅前水下	宗間天目・津茶人形茶碗	
天正8年9月7日（1580年）	（夜明）	宮内法印・天王寺屋道叱・鉄屋宗湛・山上宗二	長板ニうはくちのかま			いもがしら・梅前水下	唐からいの茶碗・人形茶碗ニフにて	
天正8年11月6日（1580年）	（夜）	関本道悦	如・ウハロ・ケせり	掌絵・思四告・四ツ耳茶釜・張替生面		ハウノキヤ	人形茶碗	
天正8年11月5日（1580年）	（夜）	大海宗磨坊	如・フトン	かふらなし・薄色橋・木橋ニ朱生筋		手桶	人形茶碗	
天正8年11月9日（1580年）	（夜明）	平野之道是	如・ウハロ				人形茶碗	
天正8年11月25日（1580年）	（昼）	妙喜庵・道叱	如・ウハロ・自在	胡口・梅生面		手桶・梅前水下	人形茶碗	
天正8年11月28日（1580年）	（夜明）	宮内法印・津田宗及・天王寺屋道叱・鉄屋宗湛	自在ニウハロ	大壺ニツ		手桶・梅前水下	人形茶碗・少ウラ了茶碗	三国之水・芦宮内法印・茶ニ色引申候
天正8年12月28日（1580年）	（朝）	千少庵	如ニフトン			つるへ	カス台・ハイカツギ天目・津茶人形茶碗	田、福治之津辛ち也・台子・釜ノ合子
天正9年正月16日（1581年）	（夜明）	山上宗二	如・フトンくさり上			手桶・梅前水下	ハイカツギ天目台なし・津茶人形茶碗	
天正9年正月23日（1581年）	（夜明）	三好孫九郎・一宗恩津坊	ウハロ・自在			手桶・梅前水下	人形茶碗	
天正9年正月25日（1581年）	（昼）	豊臣秀吉・天王寺屋道叱	如・フトン	細口・自在鶴生面・赤釜		手桶・梅前水下	黒貝天目台なし・人形茶碗	大徳寺宗四宗間遠
天正9年正月29日（1581年）	（朝）	蒲生の山本宗恵	如ニフトンくさり上	黒鉢		手桶、梅前水下	人形茶碗	手本間ニ味ニかふらなし、自生橋生面
天正9年3月10日（1581年）	（昼）	紫野和尚・慶首座・桂首座	小板ニもとの鉢物つけて、くさりに	かふらなし・蒔生面・津板ニ		手桶・梅前水下	黒貝天目、目台、人形茶碗	
天正9年3月13日（1581年）	（夜）	鉄屋宗湛・蒲生九右馬・宮内道都	小板・つり釜			手桶	人形茶碗	
天正9年3月27日（1581年）不時ニ	（昼）	鉄屋宗湛	ウハロ・小板	四ツ耳・シャクヤク生面		手桶・梅前水下	人形茶碗	
天正9年3月30日（1581年）	（朝）	天王寺屋了雪・天王寺屋道叱・後屋宗湛	小板・ウハロ・右徳			手桶・梅前水下	ハイカツギ天目・人形茶碗	弾、道叱田舎へ下向之前日之振舞也
天正9年4月26日（1581年）	（昼）	吉武宗隆・鉄道寺・鉄道岡・慶首座・鉄首座・鉄首座・山蓮	小板・ウハロ	かふらなし・石前生面・黒鉢思四告・黒貝天目・白石		手桶・梅前水下	人形茶碗・平ウラ了茶碗	
天正9年5月19日（1581年）	（朝）	小西立佐・京の猫屋宗竜・蒲生宗津之坊主	ウロ・鉄瓶ニ	硯子・手本間ニ	なつめ・手本間ニ		人形茶碗・梅前前	よし賜に植・香子
天正9年6月16日（1581年）	（朝）	池田右衛門・牧正・恵津坊	小板ニフトン引張ニ				人形茶碗ニて前後茶碗	よし賜ニ茶筅あさかは生面・金台子となるへ様
天正9年6月24日（1581年）	（昼）	宗かた・高山宗湛・天王寺屋了雪	フトン・引張ニ			梅前水下	人形茶碗	よし賜ニ手桶
天正9年7月1日（1581年）	（朝）	木仲屋・はかた・高山宗湛	フトン・小板ニ引出前	宗家之色紙・前後かケテ			人形茶碗三色入テ	よし賜ニ植、台子橋ニあさかす生面橋
天正9年11月9日（1581年）	（朝）	長慶寺松斎・木箱・関本宗湛・津茶之坊了雪木屋	如・フトン	伊賀壺・手水之間ニ為シテ見世中様助居へ入候		手桶・ハウノキヤ	小手目天目、目台、津茶人形茶碗	
天正9年12月9日（1581年）	（朝）	富田屋左衛門・あまかさき湯泉坊・藤野宗手シウト宗手	如ニフトン、長板ニ箱、台子ニ乗	定家之色紙四、手水之間ニ為候			筑紫神事箱、目台、津茶人形茶碗	手水間ニかふらなし・鶴板ニ茶筅ニ為色橋生面
天正10年2月19日（1582年）	（昼）	天神屋勝坊・久方温部	如ニフトン	胡口・梅生面白キアラキヤ		いもがしら	人形茶碗	
天正10年8月6日（1582年）	（朝）	関本宗湛・細川宗温・橋口屋道隆・高石常勝・郎・金田屋勝七	ウハロ引出	かふらなし・へちまと瓢下ノ花上生面		よしたなニいもがしら・梅前水下	人形茶碗・赤茶碗ニツにて茶の後	慈隆・勝七中なおり引合会
天正11年閏正月12日（1583年）夜ニ入		大文字屋英治・鶴蔵	如・フトン			いもがしら・梅前水下	人形茶碗	征安土令帰宅
天正11年閏正月14日（1583年）	（朝）	大文字屋英治	如・フトン・自在ニ	牛かふらなし・鶴板ニ水ヲ入テ、為茶之前ニ黒鉢生面		つるへ	ハイカツギ天目カヌノ台・津茶人形茶碗	金ノ合子・前ため茶勇
天正11年閏正月15日（1583年）	（昼）	塩木道英・小鹿道蔵	如・フトン	胡口・自生竹・長盆ニ		手桶・梅前水下	人形茶碗	
天正11年閏正月22日（1583年）	（晩）	吉田久次郎	如・フトン	かふらなし・自生生面		手桶	人形茶碗	梅前合子
天正11年2月6日（1583年）	（昼）	春屋宗岳・仲翁主・直首座	如・とんほう釜・自在	四ツ耳・自生生面・板ニ		手桶	博事箱・目台・人形茶碗	梅前合子
天正11年2月15日（1583年）不時	（昼）	吉田・道和	如・とんほう			手桶	人形茶碗	梅前合子
天正11年2月24日（1583年）	（晩）	道北薬品	宗及の人形茶碗・小遣を道春へ御順続て使遣候、代ハ金子一枚					
天正13年4月5日（1585年）	（晩）	長慶寺松斎・高石屋常好・天王寺屋了雪・永臨	はこいたかま				人形茶碗	

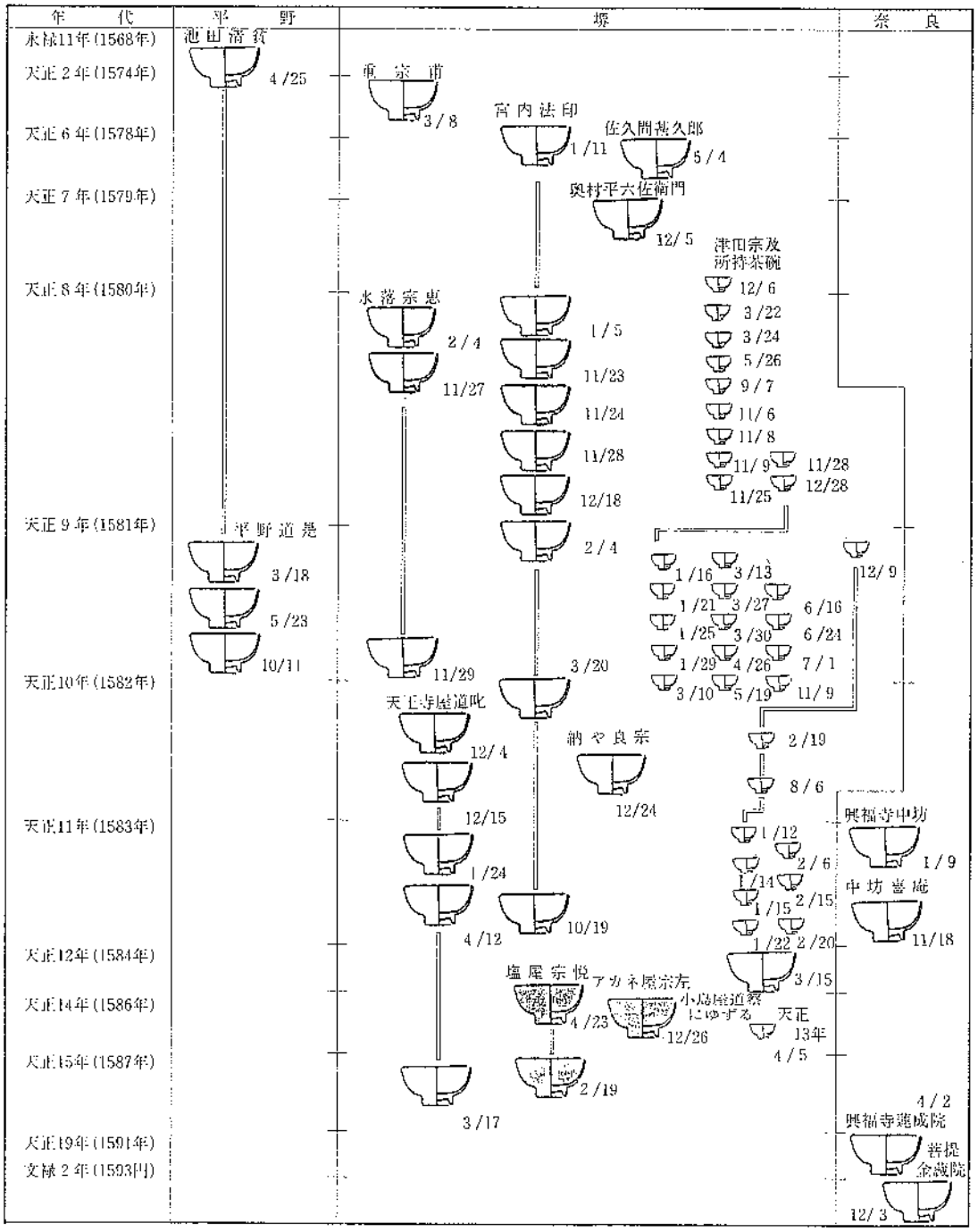
第1表　津田宗及所持の人形茶碗が使われた茶会とその取り合せ
（天王寺屋会記・宗及自会記）

日時(西暦)	亭主	客	釜・釜	炉	茶器	水指建水	茶碗	茶碗拝見記	備考
永禄11年4月25日 (朝)(1568年)	池田浄貫(平野)	津田宗及	阪炉・定紋	もぐさり四方盆・菊生テ		信楽	人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正2年3月8日 (昼)(1574年)	亜宗甫(堺)	由上宗二・津田宗及	風炉・フトンノ釜	唐草墨跡(端前見中様)		手桶	人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正6年正月11日 (夜)(1573年)	宮内法印(安土)	津田宗及	炉・ツリモノ		大海	緑桶	人形茶碗		〃
天正6年5月4日(晩より夜まで) (1578年)	荒久間甚九郎(堺)	錢屋宗訥・津田宗及	小環・鶴鶴・五徳ニ	手桶に萩を生ける。		手桶ヲ水指ニ,亀のフタ	人形茶碗		〃
天正7年12月5日 (朝)(1579年)	奥野平六左衛門(堺)	津田宗及・山上宗二・千宗易・水野監物	炉・(宗)及所蔵徳川ノ釜・くさりニ			手桶・梅前水下	人形茶碗		〃
天正8年正月5日 (昼)(1580年)	宮内法印(堺)	天王寺屋了雲・天王寺屋道叱・錢屋宗訥・津田宗及	炉・平かま・くさりに	平水間二・唐絵カケテ		手桶・亀ノフタ	人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正8年2月4日 (昼)(1580年)	水落宗恵(堺)	津田宗及・津田小十郎	炉・せめひもの釜・五徳			手桶・鶴桶	人形茶碗		〃 (高麗茶碗興寄)
天正8年11月23日 (晩)(1580年)	宮内法印(堺)	茶屋宗及・津田宗及	炉・つり物物少くさりに	大壺ツクシ		いちかしら・亀のふた	人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正8年11月24日 (昼)(1580年)	宮内法印(堺)	永臨・宇治森宗及	炉・まる釜	丈之絵(李逵)		手桶	人形茶碗		〃
天正8年11月27日(夕飯)(1580年)	水落宗恵(堺)	津田宗及	炉・まる釜			手桶	人形茶碗		〃 太壺・持出テ見せられ候
天正8年11月28日 (晩)(1580年)	宮内法印(堺)	津田了雲・錢屋宗訥・津田宗及	炉・シンノカマ・自在ニ	猩猩道神の絵			人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正8年12月18日 (朝)(1580年)	宮内法印(京都)	奥野平六左衛門尉・竹形法眼・津田宗及	炉・つり物自在ニ	かふらなし(花生)薄色釜		かめのふた	人形茶碗		〃
天正8年2月4日 (昼)(1581年)	宮内法印(堺)	錢屋宗訥・津田宗及	炉・釣物	一休ノ字カケテ		手桶・亀のふた	人形茶碗		〃 (不昨)
天正9年3月18日 (朝)(1581年)	平野道是(平野)	錢屋宗訥・津田宗及	小板ニ、ウキ亀ノ釜五徳ニ			手桶	人形茶碗	但、道雲所持之茶碗、右面、開也、前ニ山也所ニ面見たる茶碗	天王寺屋宗及他会記(宇治ヘ茶ヲ持ニ行中略)
天正9年5月23日 (朝)(1581年)	平野道是(平野)	津田宗及	小板ニウキキノ釜	カタツキ・四方盆	カタツキ	手桶・鶴前水下	只天目・人形茶碗	薄茶「道陵所持之人形茶碗」	〃 (かたつきのひらき)
天正9年10月11日 (朝)(1581年)	平野道是(平野)	錢屋宗訥・津田宗及	炉・ウキ平釜・自在	カタツキ・方盆ニ	カタツキ	手桶・鶴前物置桶	少キハイカツキノ天目・人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正9年11月29日 (朝)(1581年)	水落宗恵(堺)	元明院康盛・津田宗及	炉・シンノ釜				天目・古なし・薄茶人形茶碗		〃
天正10年3月20日 (1582年)	宮内法印(堺)	津田宗及	つり物一ツ	唐津ノ墨跡			人形茶碗		〃
天正10年12月4日 (朝)(1582年)	天王寺屋道叱(堺)	宮内法印・津田宗及	鉄丸寸、タツマ釜鉄テ	大燈(国師)墨跡、カタツキ・方盆ニ	カタツキ	手桶・梅前ハウノサキ	只天目・薄茶・人形茶碗	ハタイヨシ、色ウスク見エタリ	〃 (後ニ又井戸茶碗見申候)
天正10年12月15日 (朝)(1582年)	天王寺屋道叱(堺)	今井宗久・薄前・津田宗及	炉・タツマ釜	大燈(国師)墨跡		平水間ニしからき水指・金ノハウノサキ	只天目・薄茶人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正10年12月24日 (朝)(1582年)	神谷宗湛(堺)	錢屋宗訥・津田宗及	炉・定紋釜自在	唐草墨跡		手桶	人形茶碗		〃
天正11年正月9日 (朝)(1583年)	薬師寺甲斐(奈良)	大原雪斎・松屋久政		大ツボ	ナツメ	手桶・ハウノサキ	人形茶碗		久政茶会他会記
天正11年正月24日 (昼)(1583年)	天王寺屋道叱(堺)	亀末道意・錢屋宗訥・草部屋道設・津田宗及	炉・あられかま	給ツリテ		手桶	人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正11年4月12日 (朝)(1583年)	天王寺屋道叱(堺)	宮内法印・津田宗及	小板・あられかま	月ノ絵、手水之間ニかけられ候		しがらきめたらい水指	只天目(合なし)・薄茶人形茶碗		天王寺屋宗及他会記(茶・湯上)
天正11年10月19日 (1583年)	宮内法印(大阪城において)	羽柴秀吉・千宗易・津田宗及		唐絵・前ニ宮王かたつき四方盆	宮王かたつき		ハイカツキ天目、尼崎茶、薄茶人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正11年11月8日(1583年)	(興福寺)中坊ノキアン(奈良)	太郎屋道智・松屋久政	ツリ物、五徳ニ		ヤラウ(中次)ナツメ	硯手桶・ハウノサキ	人形茶碗・薄茶茶ウイ茶碗		久政茶会記
天正12年3月15日 (1584年)	小島宗道(堺)	千宗易・荒木道意・津田宗及	あられ釜	唐風ノ茶壺			人形茶碗		天王寺屋宗及他会記
天正14年4月23日 (朝)(1586年)	塩屋宗悦(堺)	木住坊・松屋久政	ノカツキ釜	後ニ背ノ絵カカル(王石)蒔絵	棗	雷盆円座アリ,梅前水下	天目・数ハツレ合、薄茶アカキ人形茶碗		久政茶会記
天正14年12月26日 (昼)(1586年)	アカネ屋宗佐(堺)	塩屋宗湛	平口ロ、茶釜シャウハリ壺・フトンナリ	花ノ絵	都(釜人)	シカラキ水指・メンツウニ五徳入テ	台天目、ウス茶ノ時ハ、人形茶碗ニ直ス入テ	台茶碗外ニカキメ、内ニ角印高、色アカシ、タワヨウ也	宗湛日記
天正15年2月19日 (1587年)	塩屋宗悦(堺)	神屋宗湛	平口ロ、茶、五徳スエ	雲鶴の大壺	棗	土水指・メンツウ	天目、ウス茶ノ時ハ人形茶碗也		宗湛日記
天正15年3月17日 (朝)(1587年)	天王寺屋道叱(堺)	今井宗久・津田宗及・神屋宗湛	長板ニ風炉釜		中次	水指イモカシラ・七水覆	人形茶碗ニ道具位入テ	人形ノテ色、中ノ底ニヲリイレビシテリ、底ニ蔵ニツ、人形ハメタツリ	宗湛日記

第2表　人形茶碗が使われた茶会とその取り合せ(その1)

日時(表紙)	亭主	客	炉・釜	惠	茶器	本指・添本	茶碗	茶碗拝見記	備考
天正19年4月2日 (1591年)	興福寺蓮成院(奈良)	天満屋道叱・塩屋久政	屋乗釜	大ウキ	ナツメ	信雄永指	イセ天目人形茶碗ニテウス茶		塩屋久政茶会記
文禄2年12月3日 (1593年)	菩提金蔵院(奈良)	興福寺宝蔵院・塩屋久政	霰釜	海藻の文字	薄茶ニ入		人形茶碗		〃

第3表　人形茶碗が使われた茶会とその取り合せ(その2)



第1図　茶会で用いられた人形茶碗の変遷

2．茶会記に現れる人形(手)茶碗

戦国期から江戸期にかけて書きつづられた四大茶会記[16]（松屋会記・天王寺屋会記・今井宗久茶湯書抜・宗湛日記）の中に登場する人形(手)茶碗について分析してみたい。

四大会記の中に、人形茶碗は72回登場する。その場合の他の道具の取り合せについては、表1～3を、また人形(手)茶碗の使用頻度については、第1図を参照していただきたい。

そして、茶会記を実際に検討する前に、留意すべき点を2点あげておきたい。まず、ひとつは人形茶碗が、はたして、現代の我々が認識している人形茶碗（「論語をはじめとする哲学書」や「歴史書」の名場面が、壁面にスタンプされた明時代の青磁茶碗）と同一であるかということである。

後述するが、スタンプのない無文の青磁茶碗でも、「人形茶碗」と呼んでいる例がある。人形茶碗は、単独で個有の名称を持つ「松本茶碗[17]」や「安井茶碗[18]」と違い、一般の名称であり、我々の認識と違う人形茶碗が、その中に混っている可能性のあることを確認しておきたい。

ふたつめに、所持の問題がある。茶会記に「××某所持の茶碗」と記されているとき、××某が現在の所有者である場合と、かつての所有者であった場合の2つのパターンがある。

さらに、この「所持」という言葉が現代我々が使う「所有」とい意味を同じくするのか、どうかの問題がある。四大会記の時代は、茶道具類が、けっこう気楽に貸借りされている。道具をA氏から借りたと、茶会記にきちんと記されていればよいが、記されていない場合もあるのではないか。Bという茶人が使っている茶道具が、確実にBの所有物であるとは言いきれないのである。

四大茶会記に登場する茶人で人形茶碗を用いてる茶人は、17人ほどいるが、だからと言って、四大会記の時代17個の人形茶碗があったとは言えないのである。この2点を念頭におきつつ、個別に分析をすすめてゆきたい。

池田清貧の人形茶碗

人形茶碗が登場する最初の茶会は、永禄11年（1568年）4月25日、摂津平野郷[19]の池田清貧の茶会である。(「天王寺屋会記津田宗及他会記」―以下「宗及他会記」と略)

この人形茶碗は、清貧と同じ平野郷の住人平野道是が後に手に入れたらしく。天正9年（1581年）3月18日の道是の茶会で拝見した宗及は、この茶碗について「但[ダシ]、道陳[20]所持之茶碗、始而[ハジメテ]開也、前ニ（池田）清屯所ニ而[テ]見たる茶碗」という拝見記を残している。

この拝見記は、重要な意味を持っている。第一に、この人形茶碗は、北向道陳がかつて所持していたという由来を持つこと、第二に、平野道是が当日の茶会で、初めて、宗及にこの茶碗を披露したこと（逆に言えば、この人形茶碗を披露するために茶会を催したこと）第三に宗及は、この茶碗を以前に池田清貧の茶会で見ていること以上である。

しかし、この、最後の記述は、前後のつながりから考えると、「以前に池田清貧の家で、平野道是の人形茶碗と同様の（良く似た）茶碗を見た」という意味に取ることも出来るので、同一の茶碗が3人の間に伝世したと言い切るには勇気がいる。

北向道陳は、永正元年（1504年）－永禄５年（1562年）の生涯[10]とされることから、人形茶碗の使用時は、1560年代以前まで遡る可能性もでてくるわけである。

重宗甫の人形茶碗

天正２年（1574年）３月８日に、堺の商人で秀吉の茶頭であった[11]重宗甫が用いている。重宗甫が人形茶碗を用いたのは、この１度だけである。

堺では天正６年５月４日の佐久間甚九郎、天正10年12月24日の納や良宇、天正14年12月26日のアカネ屋宗佐など、一生涯に一度（資料となるべき茶会記の遺存品が少なく断定することはできないが）だけ、人形茶碗を使っている茶人がいるが、前述したように他人から借りた茶碗を使っているのではないかという疑いももたれるのである。

宮内法印の人形茶碗

堺代官宮内法印（松井有閑[12]）は天正６年（1578年）１月11日から、天正11年10月９日まで、計９回人形茶碗を用いている。10月19日の羽柴秀吉、千宗易、津田宗及を客としておこなった茶会では鷹絵、宮王肩付、ハイカツギ天目、尼崎台などの名物道具と伴に用いられており、宮内法印が人形茶碗を重要視していたことがわかる。

この茶碗を最後に、宮内法印の人形茶碗は姿を消してしまう。おそらく秀吉に献上されたのではないか。

津田宗及の人形茶碗

津田宗及は、自会記（「天王寺屋会記津田宗及自会記」―以下「宗及自会記」と略）を残しているので、人形茶碗を手に入れてから売却するまで、何度用いたか、正確に知ることが出来る。

（他の茶人の場合、四大茶会記の記述者を招いた茶会の内容のみが後世に伝えられて[13]いるので、人形茶碗の実際の使用回数は不詳である。）

さて、宗及は、天正７年12月５日、奥村平六左衛門の茶会で、人形茶碗で茶を振舞われている。その際、奥村平六左衛門は、宗及所持の姥口の釜を用いている。

翌日（天正７年12月６日）、宗及は奥村平六左衛門を自亭に招いて、茶会をおこなっている。その際、初めて人形茶碗を用いている。

奥村平六左衛門は、その後の茶会で、人形茶碗をまったく使っていないことから、宗及が奥村平六左衛門に人形茶碗をゆずってもらった。（もちろん買い取ったという意味である）可能性もある。釜の貸借をするような間柄であることから、以外とすなおにゆずられたかもしれない。

宗及は、天正８年に12回、天正９年に16回、天正10年に２回、天正11年には６回というように人形茶碗を使っているが、天正11年２月20日に荒木道薫（村重）の仲介で、堺商人小島屋道察に金子一枚でゆずっている。

その後、天正12年４月５日に宗及自会記に人形茶碗が登場する。これは宗及が新たに購入したものか、借り物なのかはわからない。

宗及は、青磁の名物茶碗「松本茶碗」を手に入れるため（織田信長の命によるものと考えら

れる）父ゆずりの宗達棚の４種（平釜・沸子口の柄立・合子・懐柿）を質に入れ金を借りている。

金子一枚という値段が高いか安いか、よくわからないが、松本茶碗に比べるとかなり安い値であると言うことが出来る。

水落宗恵の人形茶碗

千宗易（利休）の女婿といわれる水落宗恵は天正８年から９年にかけて、３回、人形茶碗を用いているが、拝見記がないので茶碗の実体は分らない。

天王寺屋道叱の人形茶碗

天王寺屋道叱の茶碗は、天正10年に２回、天正11年に２回、天正15年に１回使われている。

この茶碗については、天正10年12月４日には、津田宗及が、天正15年３月17日には神屋宗湛が茶会記に拝見記をしている。宗及は、道叱の人形茶碗について「ハタイヨシ、色ウスク見エタリ」と評し、宗湛は「人形ノテ也、中ノ底ニヲリイレビシアリ、底ニ筋二ツ人形ハナクソロ」としている。

宗及の拝見記は、意味が分かりにくいが宗湛のくわしい拝見記は、示唆に富んである。

第一に、この茶碗は「人形ノテ（手）」であり、「人形ハナクソロ（無く候）」ということである。これは、「人形茶碗」ではなく、人形はないが、人形茶碗に形のよく似た茶碗＝「人形手茶碗」というべき茶碗なのである。

しかし、津田宗及は、人形がないにもかかわらず、この茶碗を人形茶碗[45]と呼んでいる。逆に考えると、四大茶会記に現れる「人形茶碗」の中に、人形のスタンプがない茶碗＝「人形手茶碗」が混っている可能性がある。

第２の問題は、「中ノ底」にあるとされる「ヲリイレビシ」である

桔梗文之亟氏[46]によると、公家山科家の家紋（図２―右）は「稲妻菱」と呼ばれている。また、備中岡田藩主伊東氏の家紋（図２―左）は、伊藤家の家伝によると「丸に折入」と呼ばれ織田信長より戦功の賞として与えられたものとされる。以上のことから「ヲリイレビシ」は、雷文を基本とする文様のことではないかと思われる。

遺跡出土品、伝世品の「人形茶碗」の中には、内外面に雷文帯をめぐらすものが多く、その中でも「中ノ底（内面の中位と思われる）」に雷文帯をめぐらすものは、波佐谷遺跡出土品[46]、浪岡城出土品（図３―59、図４―20）、根来寺出土品（図―８）などの例がある。しかしいずれも人形のスタンプが押されて、おり口縁端部外面にも雷文帯がスタンプされる。天王寺屋道叱の人形手茶碗のような例（内面に雷文帯があって人形のないもの）は、管見では未だお目にかかっていない。

塩屋宗悦の人形茶碗

天正14年４月23日と天正15年２月19日の茶会での塩屋宗悦は人形茶碗[45]を用いている。４月23日の茶会で、奈良の松屋久好が、この人形茶碗を「アカキ人形茶碗」と拝見記でしるしているが、これが人形茶碗の色が、はじめて指摘された例である。この「アカ」色は、断定はできないが、伝世品などの例から「枇杷色」と呼ばれる黄褐色の色を呈していたのではないだろうか。

しかし、天正15年２月19日の茶会でこの茶碗を実見した神屋宗湛は、通常ならば細かい所まで道具を拝見して、拝見記を残すのに、この人形茶碗の色については、一言も触れていない。これは、いささか気になるところである。

アカネ屋宗左の人形茶碗

天正14年12月26日の茶会で用いられている。神屋宗湛の拝見記によると「右茶碗外ニカキメ、内ニ角印高、色アカシ、クワンヨウ也」とある。前述したが、宗湛は茶会の折、茶道具を入念に観察し、具体的に記述するので、伝世品や発掘品と比較検討する祭、参考になる。

まず、「外ニカキメ（掻目）、内ニ角印高」とは、「外側にクシ描文があり、内側の高い場所（口縁端部）に角（四角）の印がある」という意味ではないだろうか。

外側に掻目のある青磁碗としては、図４―21があげられる。高台が高く高台径の小さなプロポーションは、人形(手)茶碗に似かよっている。

次に「角印」についてであるが、図４―18などは、内側の口縁端部にスタンプされる雷文が、雑で角印状になっており、このような例のことを言ったのかと思われる。

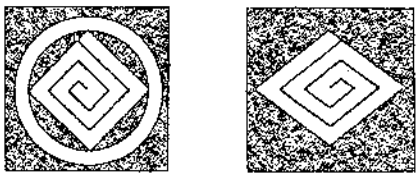
また、この茶碗の口縁端部外面の雷文は、ロクロ成形時に出来た凹線をまたいで、スタンプされており、これを横方向の「カキメ」に見ようと思えば見えなくもない。

「色アカシ、クワンヨウ也」は色は赤く、貫入がある、という意である。

奈良方面で使われた人形茶碗

奈良では、天正11年１月19日に興福寺中坊で、同年11月８日に、興福寺中坊喜庵が用いている。２人は同一人物かもしれない。堺に比べて人形茶碗の使われはじめは、かなり遅い。

天正19年４月２日には、興福寺蓮成院が、文禄２年12月３日に菩提金蔵院が用いているこれが四大茶会記に現れる最後の人形茶碗である。



「丸に折入」文（伊東家）　「稲妻菱」文（由利家）

真藤建志郎「家紋」の事典1985、日本実業出版社より

第２図　２種の雷文

３．遺跡出土の人形(手)茶碗

遺跡出土の人形(手)茶碗のうち、発掘調査報告書等に記載されているものについて、以下で紹介してみたい。

①　青森県浪岡城出土品

浪岡城遺跡は、青森県南津軽郡大字浪岡字五所地内に所在し、城域は20万㎡以上になると推定される。扇状地上に立地し、平坦部を堀によって８つの居館に区分している。出土遺物の年代により、遺構の時代区分がおこなわれている。

北館の遺構はⅠ期（15世紀後半）、Ⅱ期（16世紀前―中頃）Ⅲ期（16世紀後半以降）に、内館の遺構は、Ⅰ期（15世紀後半以前）Ⅱ期（16世紀前葉）、Ⅲ期（16世紀中葉）、Ⅳ期（16世紀後葉以降）の各期に区分される。第３図は、内館の竪穴遺構ＳＸ244出土遺物である。ＳＸ244は、内館Ⅲ期にあたり、出土遺物は、川原御所の乱（1562年以前）に使用されてい

たものと考えられる。

人形茶碗（59）は、口径16.2cm、器高10.0cm、高台形5.4cm、口縁端部外面と内面中位にスタンプによる雷文帯がある。この茶碗の場合外面の雷文帯は、亀井明徳氏の分類[20]によるA形式（雷文の回転方向が同じ単位文を連続することなく単独で並べるもの）で、内面の雷文帯はB形式（A形式と同じく連続しない形であるが、単位文の回転方向をその中心で逆転させるもの）であることには興味をもたれる。見込みは平担で「金玉満堂」と「分銅」を組合せた文様がスタンプされる。口縁は立ち上がり、端部では垂直に近くなる。内面には、人物・植物などの文様がスタンプされ、釉色は青緑色である。

第4図の遺物は、北館の遺構面から出土したものである。18、19、20は、口径はいずれも15cm以上と大型である。雷文帯はスタンプによるもので、18、19は、口縁端部内外面に押される。18は内外面とも亀井分類のA形式。

19は、内面はA形式、外面はB形式である。

20は、口縁端部が欠けているため雷文帯の形式は不明である。20の釉色は、灰黄色である。

24は、伝世品の中に多くみられる小型の人形手茶碗で、口径は、11.2cm、器高は5.2cm高台形は4.9cmである。見込みは平担で、口縁は急に立上る。18、19、20、24は遺構に伴わないものであるが、浪岡城は、天正6年(1578年)に落城したとされるが[21]、天正18年(1590年)の奥羽仕置による破却までの出土遺物も若干認められることから、遺物の下限を天正18年までと考えることができる。

(2) 堺環濠都市遺跡甲斐町西二丁十七番地　（ＳＫＴ60地点）出土遺物

堺環濠都市遺跡は、大阪湾東岸の堺砂堆上に立地する東西1km、南北3kmの大遺跡である。室町期から桃山期におけて文字どおり「黄金の日々」の繁栄を誇り、「東洋のベニス」と頌われた自治都市「堺」の全市域が遺跡の範囲内に含まれている。

ＳＫＴ60地点は、環濠都市の中心近くに位置する。人形茶碗が出土したのは、第Ⅱ期生活面の磁石建物ＳＢ005に伴う井戸ＳＥ004の周辺の落込みであるＳＫ047からで、備前鉢、青磁蓮弁碗、土師質小皿が共伴している。

人形手茶碗[22]は、人形のスタンプではなく、口径（推）13.4cm、器高7.6cm高台径5.2cmで、見込みに一条の圏線があり、中央に「花弁」中に「積」の陽刻があり、中央はやや盛上っている。Ⅱ期生活面の直上には、天文元年の大火層（1532年）とみられるカーボンと焼土の混層が堆積している。

(3) 堺環濠都市遺跡甲斐町西二丁二六番　（ＳＫＴ75地点）出土遺物

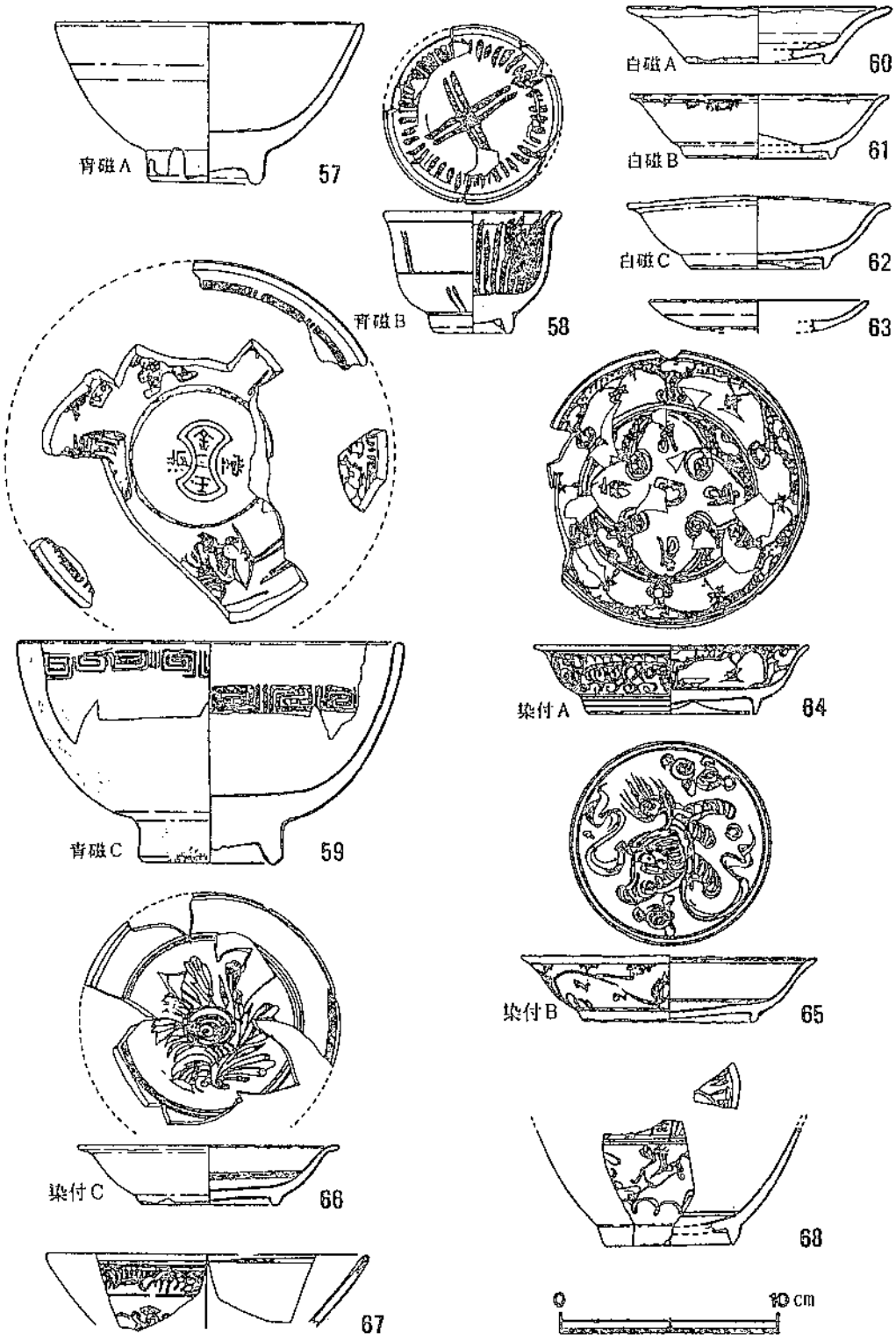
ＳＫＴ60地点にほど近いＳＫＴ75地点からも人形手茶碗の出土がみられる。

ＳＫＴ60地点の第7層は、第7次生活面直上に堆積しているスラッグを含む焼土層である。

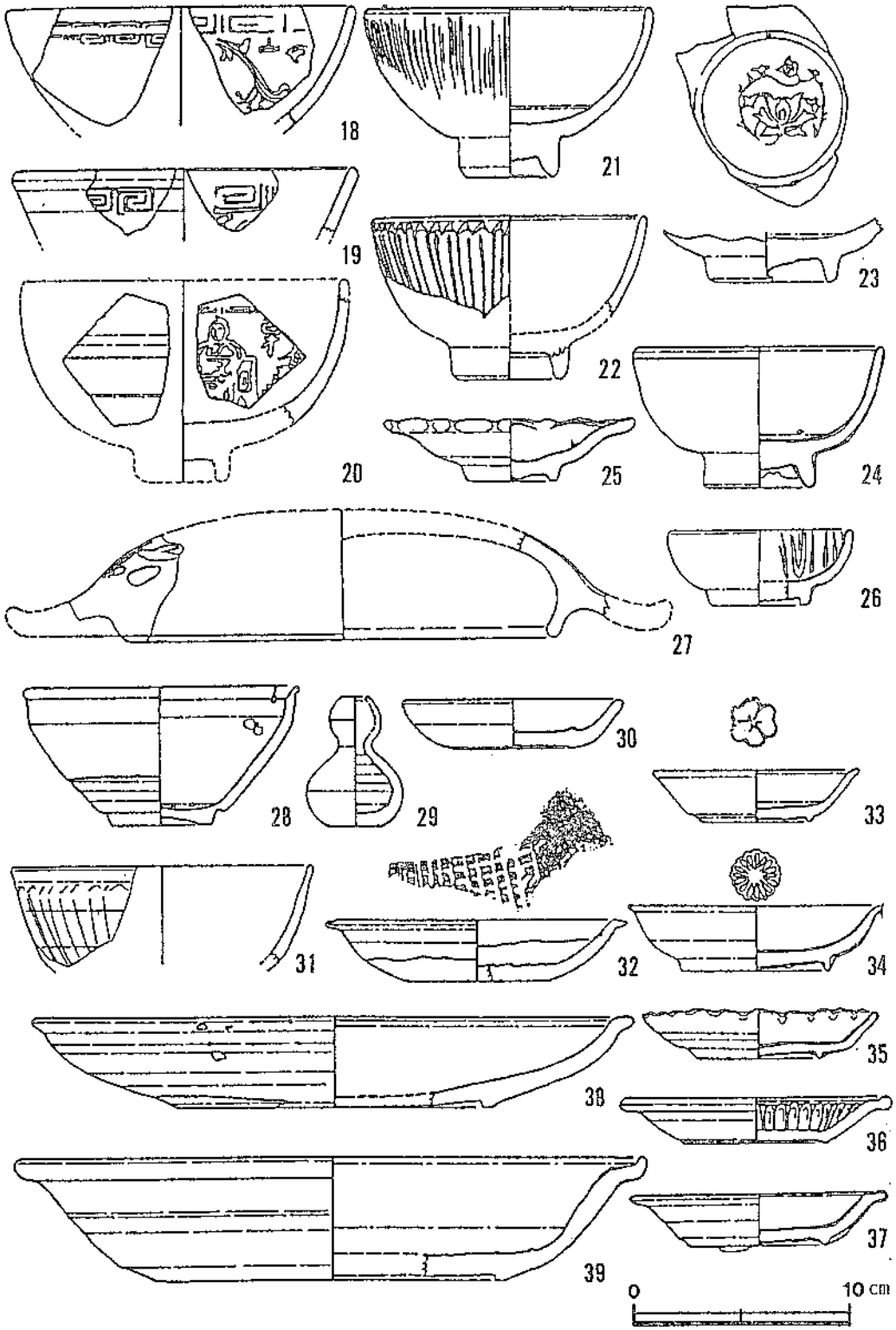
第5図の20は、口径11.3cm（推）、器高6.95cm高台形3.9cmである。見込みに花弁文があり高台内に蛇1目状露胎がある。釉色はにぶい黄緑色である。

全体のプロポーションは、浪岡城出土品（4図―24）によく似ている。第7次生活面は16世紀前半と推定されている。

第8層は、第8次生活面の上層に焼土を含む4層の堆積層からなる。



第3図　北館114 SX 244出土遺物



第４図　北館遺構面出土遺物

（6図―6）は口縁内外面にスタンプによる雷文が施され、人形茶碗の可能性がある。この雷文は、宗湛のいう「角印」に近いものである。口径は15.7cm（推）釉色は灰味黄緑色である。

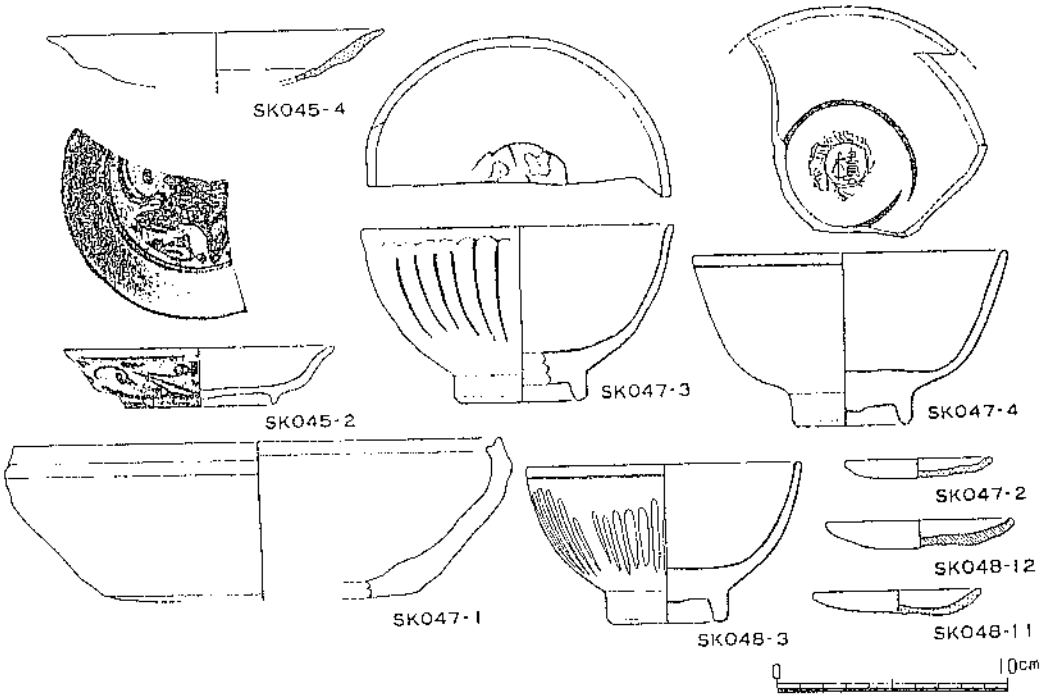
第8層は15世紀後半の遺物を含んでいる。

④　石川県小松市波佐谷遺跡出土遺物[6]

1902年に一括遺物として発見されたものの中に人形茶碗が含まれている。その状況は、信楽焼あるいは越前焼に類する大壺1個の中に銅製花瓶・銅製香炉・陶器製香炉・食器など数十点が埋蔵されていたというが、現在東京国立博物館の蔵するものは、陶磁器9点である（美濃天目茶碗1口、青磁碗1口、青磁人形茶碗1口、青花皿4枚）。このうち美濃天目茶碗は大窯編年Ⅰ期[30]、青磁碗は、亀井明徳氏の分類による[31]青磁蓮弁碗B―2類、青花皿は口縁が端返るタイプである。

人形茶碗は、口径17.8cm、器高10.2cm、高台径6.3cm、竹の節高台内は露胎で兜巾がある。内面は三方に人物、それぞれの人物の左右に三字または五字の文字、人物の間には樹木、鳥、鹿などがおかれ、その上方に雷文帯があり、外面の口縁端部に雷文帯がいずれもスタンプであらわされる。見込みの中央には不明の模様の痕跡がある。雷文は、内外面とも亀井分類[32]のB形式である。釉はやや黄味を帯びた青緑色の青磁釉で、透明性があり、いわゆる七官手に近い調子である。

この人形茶碗を含む一括遺物の埋納時期は15世紀後半末～16世紀初頭と考えられる[33]。



第5図　SKT 60 第Ⅱ期遺構出土遺物

⑤　和歌山県那賀郡岩手町根来寺出土遺物

根来寺は、12世紀中葉に興教大師覚鑁が開創したとされている。室町時代から戦国時代にかけて次第に勢力を増し、とりわけ戦国時代には、宗教活動のみならず、僧兵とよばれる武装集団を擁した城砦的な性格を持った寺院であったと考えられる。

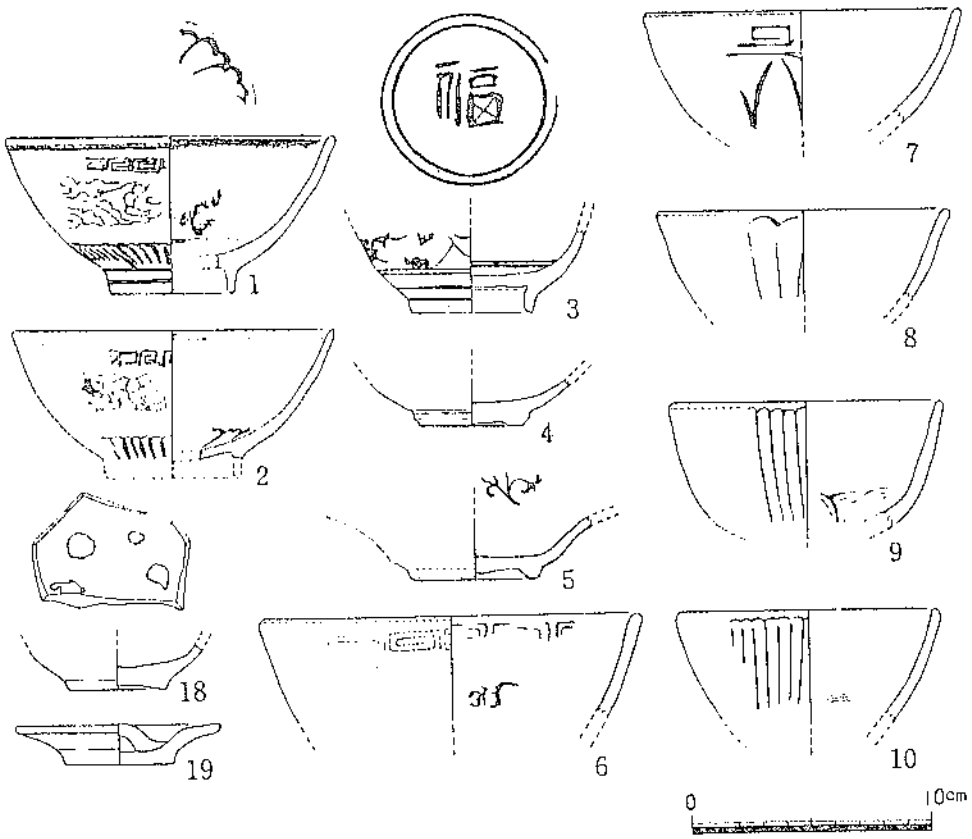
しかし、天正13年（1585年）に豊臣秀吉の焼打ちにより、一部の建物を残して、灰燼に帰した。

人形茶碗は、第２次調査のＳＫ―17から出土している。ＳＫ―17は、天正13年の兵火にかかっており、甕ピットを称される埋甕遺構である。

人形茶碗の口径は16.3cm、器高9.7cm、高台径5.4cm、釉色は淡草緑色を呈し、高台内は、露胎となるもので、内面に雷文帯を配し、口縁部外面にも雷文帯が、いずれもスタンプにより刻まれる。雷文帯は、亀井分類のＡ類である。

口縁内面には、人物座像・文字がスタンプされている。欠損のため全容は不明であるが残存する人物座像の横の文字は、朧げながら「李白功書巻」「孔子泣顔？」が読みとれる。

本来６人の人物座像を配していたと考えられる。共伴する遺物として、白磁皿・青花皿・土師質皿・備前鉢などがあげられる。

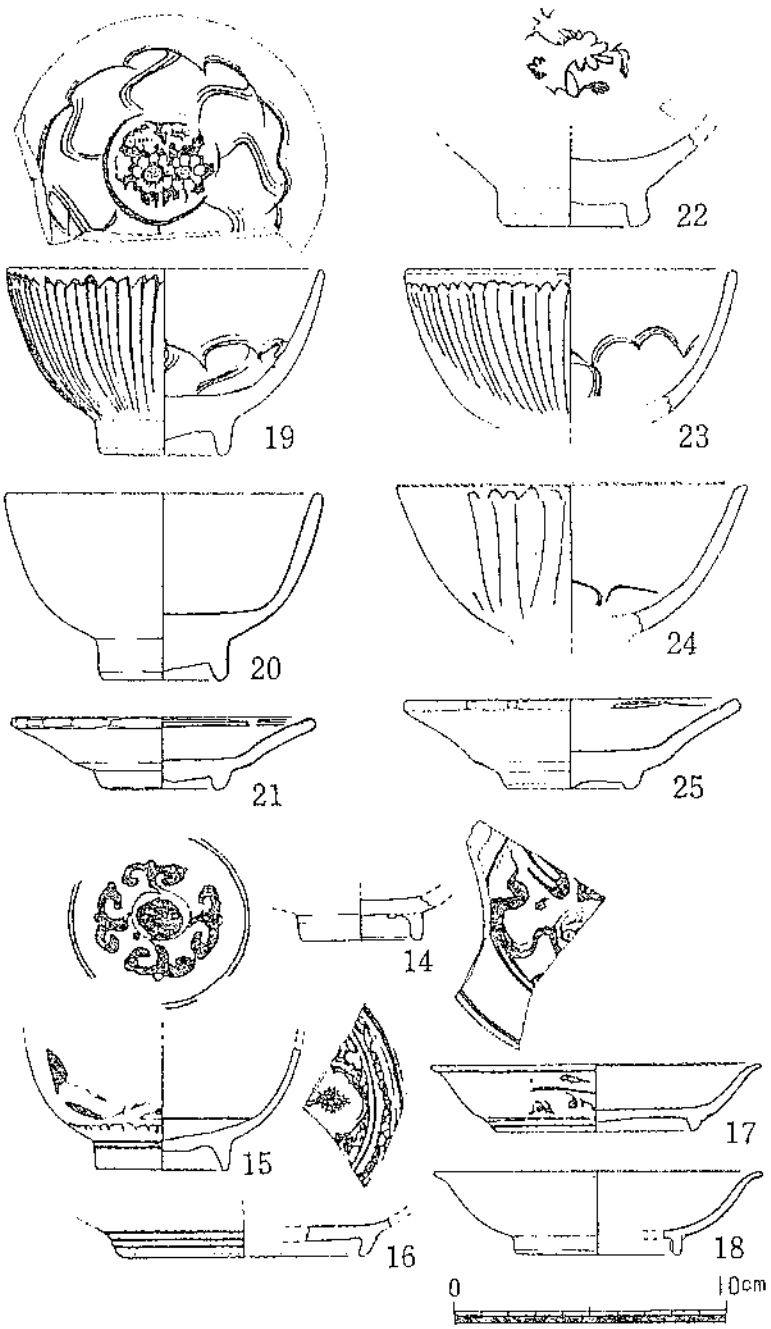


第６図　SKT 75 第８層出土遺物

⑥ 滋賀県彦根市妙楽寺遺跡出土遺物

妙楽寺遺跡は、彦根市日夏町字古屋敷に所在する。住居跡・溝・土壙などの遺構群は、Ⅰ期（弥生～古墳時代前期）Ⅱ期（古墳時代中期～平安時代）Ⅲ期（平安時代末～鎌倉時代）Ⅳa期（室町時代中期・15世紀）Ⅳb期（室町時代後期・大窯Ⅰ・Ⅱ期併行期）、Ⅴ期（室町時代末期・大窯Ⅲ期併用期）に分かれている。Ⅳa・Ⅳb・Ⅴ期は、同一遺構面に重複して存在する。

人形手茶碗は、Ⅳb期（1490年代～1570年代）の溝ＳＤ453から出土している。この茶碗は底部の厚さが２cmもあり、口縁端部外面に一条の沈線を廻らせる。高台内は露胎で、断面に漆継の痕がある。釉色は暗い黄色である。口径11.3cm、器高6.6cm、高台径4.6cmである。内面中位以下に、茶筅擂りの跡がある。

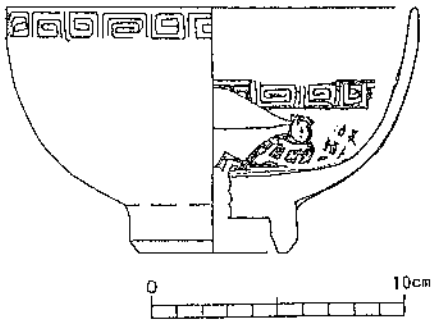


第７図　SKT 75 第７層出土遺物

4．伝世された人形(手)茶碗

伝世品については、西田宏子氏が、くわしい分析をおこなっているので一読をおすすめしたい。本論では、その概略を述べるに留めたい。

人形茶碗の中で江戸初期からの伝来を有するもののうち、「鴻池家蔵」(『大正名器鑑』)のものは、「少庵所持」と宗旦が箱書きしている。外箱は、原叟の書付である。実見記によると、釉は厚く批把的で、口縁に一カ所の喰い違いがあり、高台は竹節状で、内側に人形が三カ所鮮明にあらわれ、雷文も断続して施されている。

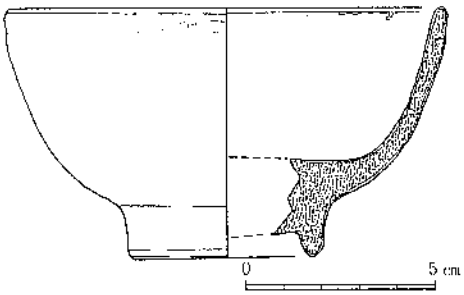


第8図　第2次 SK−17 出土青磁

他に小堀政之の箱書付による「青磁人形茶垸」とあるものも人形茶碗である。

伝世品の人形茶碗は、口径が12−13cmになるものが多い。釉は、黄緑色から青褐色までさまざまであるが、いずれも透明度がなく、厚くかけられている。雷文繋文が外側にあるものとないものとがある。見込みの文様は、「人物文が背景の建物と共に印刻されているもの」「人物文と幾何学文とが組合されて印花であらわされているもの」などがあり、雷文も印文でめぐらしたものがある。

西田氏は、人形茶碗について「このような手の青磁は、おそらく十六世紀に輸入され、その中から、大きさや焼け成りの優れた、雅味のあるものが選ばれたものか、あるいは注文によるものではないかと考えたい。その高い高台の作りや、やわらかな焼成り、腰を小さく口縁へと開く姿は、どことなく井戸茶碗と共通した雰囲気を示している。そうしたところが、珠光茶碗よりも遅くまで好まれ、使用され続けた理由といえるのではなかろうか、また一方では、井戸茶碗との関係を考える上でも興味ある茶碗と思われる。」という言葉でしめくくっている。示唆に富んだ指摘と思われる。



第9図　妙楽寺遺跡出土人形手茶碗

5．ま　と　め

茶会記・出土品・伝世品の3つの方向から分析をすすめてきたが、それらの結果をまとめておきたい。

茶会記による人形(手)茶碗の初見は永禄11年（1568年）であるが、この茶碗は、天正9年(1581年）に北向道陳の茶碗として再登場してくる。北向道陳のおこなった茶会は、天文11年(1542年)、天文24年（1555年)、永禄2年（1559）の3回が茶会記に残っている。

茶道人名事典[111]によると、北向道陳の生涯は永正元年（1504）永禄５年（1562年）とされている。浪岡城・ＳＫＴ60地点・ＳＫＴ75地点第７層・波佐谷遺跡出土品は、いずれも16世紀前半ー中頃に埋没（廃棄）したものであり、北向道陳の生存中には、見る機会の比較的多いタイプの青磁茶碗であったと思われる。しかし、これらの出土品は、茶筅擂りのあとがまったくなく、抹茶茶碗としては用いられていなかったようである。

この時代は、珠光茶碗[112]、東山御物以来の流れを汲む、松本茶碗[113]（輪花碗）など14世紀以来の伝世茶碗が、青磁茶碗の中心であったのである。

人形(手)茶碗が、初めて茶会記に登場するのは、永禄11年であるが、世にもてはやされ始めたのは宮内法印・水落宗恵・津田宗及など名だたる茶人達が人形(手)茶碗を手に入れた天正８～９年頃からであろう。

天正８～９年頃に時間軸を立てると、人形(手)茶碗は、頂度一世代前に輸入されたやや古い茶碗であり、このあたりから、一世代前の茶人である北向道陳所持云々の由来書きも生れたものと考えられる。

森村健一氏の分析[114]によると、堺環濠都市遺跡においては、応永６年（1399年）～天文元年（1532年）までは、日用雑器においても青磁が主流であるが、天文元年（1532年）～天文22年（1553年）には、青花・白磁が、青磁を凌駕するとしており、人形(手)茶碗は、青磁碗の輸入減少期の茶碗ということができる。

天正期を含む遺構から出土する例として、根来寺出土碗と妙楽寺出土碗がある。

根来寺出土[115]のものは、口径16.3cmと大型であり、また窪田氏のいうように、日用品的な要素をもつものと考えられる。

妙楽寺出土品は1490年代～1570年代の遺物が出土する溝から出土しており、口径11.3cmと小振りで、釉色は暗い黄色、断面に漆継の痕跡があり、内面に茶筅擂りがある。

人形(手)茶碗は大・小２種類があり型は似ているが、小型品は人形のない茶碗が多い。

妙楽寺出土碗の色調は、いわゆる枇杷色である。天正14年以降、堺の茶会で使われた人形茶碗は、アカキ茶碗か人形のない茶碗（人形手茶碗）のみである。妙楽寺出土碗は、両方の特徴を足して２で割ったような茶碗である。

また、西田氏が指摘しているように、人形(手)茶碗は、高台径は小さく、高台高は高く、全体のプロポーションは、李朝の井戸茶碗[116]に似ている。井戸茶碗が、高麗茶碗群の中から析出され、独自の名称をあたえられて、茶会記に登場してくるのは、天正六年からである。

人形茶碗が流行しだした天正前半期頃、青磁茶碗は、輸入は減少し、人形茶碗も輸入はされなくなっていたのだろう。また、出土品には大振りの鉢が多く、もとより、茶の湯にふさわしい小型品でスタンプのあるものは、少なく、ついには、スタンプのないものでも人形茶碗の似ているものは、「人形ノ手」として、人形茶碗の仲間として、採用するに至ったものと考えられる。

また、天正14年以降、「アカキ茶碗」２個出現するのは、井戸茶碗や長次郎の赤楽茶碗など、赤系統の茶碗の流行があったのではないだろうか[117]。

日常の雑器の中から、茶道具にふさわしいものを取り上げていく試みは、茶会記によっても、天文年間からおこなわれたことがわかる。東山御物の流れを汲む青磁茶碗・天目茶碗・青磁花入・古銅の花入にまじって、日常雑器からの取上げ品、いわゆる侘道具の使われる回数が、時代が下るにしたがってふえてゆくのは、侘茶の確立していく過程を示すものといえる。

それらの侘道具の例として、高麗茶碗や人形(手)茶碗をあげることが出来る。しかし、時代の流れは転用から創作へと進んでゆく、赤沼多佳氏の論考[10]によると「水指の場合、かつては、桶や手桶・釣瓶・あるいは土物の壺など日常的な器が取上げられてきたが、天正15・16年頃から明らかに新しく水指として造られた思われる。備前や信楽の水指が頻繁に使われ、また花入も青磁や古銅などが中心であったが、天正13年頃から備前の花入が使用されるようになる。すなわち茶の湯道具は天正14年頃を境に変わりつつあったようで、いうまでもなく、こうした現象は茶の湯自体の有様が変化したことを物語っている」としている。

茶碗についても、天正14年には、長次郎の楽茶碗と思われる茶碗や、今日の志野茶碗にあたると思われる瀬戸白茶碗が登場する。

東山御物の流れを汲む茶道具、とうぜんそれは、「書院の茶の湯」・「台子の茶の湯」にふさわしいものである。それら古典的な茶道具と利休居士のつくり上げた「小間の茶の湯」・「棚のない茶の湯」で使われた独創的な茶道具の間に出現しては、消えていった数々の侘道具のひとつに人形(手)茶碗を位置づけることが出来よう。

天正16年～18年の間に成立したと考えられる山上宗二記[11]には、「……惣テ茶碗ハ唐茶盌スタリ、当世ハ高麗茶碗・瀬戸茶盌・今焼ノ茶盌迄也、形サヘ能候ヘハ数寄道具也」とある。唐茶盌（中国製茶碗）の中では、比較的新しい時代に登場した人形(手)茶碗も、当世流行の創作茶碗には、なすすべもなく敗れ去ったのである。

6．おわりに

茶道教室で師匠とかわした片言が、人形茶碗にのめり込むきっかけとなって、ついに小論を書くに至った。

本論では、ほとんどふれなかったが、中国における型押し青磁茶碗の生産は、わずかな期間だったようである。より手軽に作画することができ、製産技術がどんどん向上してきた青華染付にとって替えられてしまったのである。

この、日本にわずかに輸入された茶碗が、それも、輸入後何十年もたってから、侘茶の道具として取上げられることになった。その日から人形茶碗の運命は大転換をし、その中の一碗は、数々の名物道具を伴って、秀吉が客となった茶会にまで登場するのである。

作者である中国人陶工には知る由もないことである。

(1990.1.9稿了)

註

(1) 李知宴『龍泉青磁の発展と輸出』（貿易陶磁研究No.2 日本貿易陶磁研究会1982）

(2) 前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会1975）

(3) 長谷部楽爾『石川県小松市波佐谷出土の古陶磁』（ＭＵＳＥＵＭ255　1972）

(4) 亀井明徳『室町期の貿易陶磁器』（日本貿易陶磁史の研究同朋社1986）

(5) 西田宏子『百碗の周辺』（館蔵茶碗百佳撰　根津美術館　昭和60年）

(6) 四大茶会記；茶会記とは、茶事の日時、参会者、茶事につかわれた茶道具、抹茶の種類、会席の献立などを記した備忘録である。自分が客となった時、亭主方の茶道具等を記した「他会記」と自分が亭主となって催した茶事の全貌を書き残した「自会記」がある。

室町末期から江戸初期に活躍した著名な茶人の残した茶会のうち史料価値の高いもの４本が四大茶会記とよばれている。

１．**松屋会記**；奈良轉害（てがい）郷の漆屋、松屋久政・久好・久重三代の茶会記・他会記のみ、天文２年（1533年）から慶長元年（1596年）まで記されている。

２．**天王寺屋会記**；堺の豪商天王寺屋津田宗達・宗及・宗凡三代の茶会記と自会記有り、天文17年（1548年）から天正18年（1590年）まで記されている。四大茶会記の中で唯一自筆本が残っている。

３．**今井宗久茶湯日記抜書**；堺の豪商納屋今井宗久の茶会記の抄写本である。天文23年（1554年）から天正17年（1589年）まで記されている。他会記と自会記が取りまざっている。

４．**宗湛日記**；博多の豪商神屋宗湛の茶会記及び日記　天正14年（1586年）より慶長18年（1613年）まで記されている。　※なお本文をまとめる時、引用した上書は、いずれも、『茶道古典全集』（淡交新社　昭和32年～37年）に収められている。

(7) 村田珠光の弟子松本珠報が所持しているといわれる青磁の輪花碗、天王寺屋宗及他会記、山上宗二記に登場する。筒井紘一『詳解山上宗二記』（淡交　昭和58年１月～昭和60年２月）

(8) 医師曲道瀬道三から信長、秀吉、大友宗麟と伝えられた青磁碗、松本茶碗と同様輪花碗であったと思われる。筒井紘一『同上書』

(9) 現大阪市平野区

(10) 北向道陳　永正元～永禄五（1504～62）室町末期の茶匠、堺の舳松の人、本姓は荒木氏、北向きの家に住み北向と改めたという。生業は医師と伝え隠棲して空海（右宗）から東山流の茶法を受け、唐物の目利きとして知られた。武野紹鷗と親交があり門弟の千宗易を紹鷗に引き合せ、紹鷗の墨跡、松花の茶壺、中屠衝、善好茶碗などの名物道具を所持した。

桑田忠親編『茶道人名事典』（東京堂出版　昭和57年）

(11) 同上書による。

(12) 生没年不詳、安土桃山時代の茶匠、屋号を櫛屋という利休に茶を学び、秀吉に仕え茶頭八人衆に列した。『茶道人名事典』による。

(13) 生没年不詳、安土桃山時代の武人、堺の政所、信長に仕え右筆となる。信長の名物茶器収集に尽力、法印に叙せられ宮内法印と称した。秀吉にも近似したが、天正13年堺政所を罷免され、

その後の動静は明らかでない。『茶道人名事典』。

(14) 註(6)参照

(15) ただし、天王寺屋道叱が人形(手)茶碗を２碗もっており、宗及と宗湛の見た茶碗が別のものであったという可能性もなくはない。(しかし、おそらく道叱は一碗しかもっていなかったと思われる。)

(16) 桔梗文之亟『特集日本の基本紋章254』(日本紋章事典　歴史百科　1978　第２号)

(17) 以下、人形のスタンプのあるものは「人形茶碗」、形は似ているが人形のスタンプのないものは「人形手茶碗」、両方をまとめていう場合は、「人形(手)茶碗」としたい。

(18) 陶磁器を焼成し、窯の火を落して冷却するとき、胎土と釉の収縮率の違いから釉に細かいひび割れ状のものができる。15～16世紀の青磁によく見られる。

(19) 工藤清泰・佐々木達夫『浪岡城』(浪岡町教育委員会1989)、工藤清泰『北日本・浪岡城戦国城館の中世遺物』(東国土器研究第１号　東国土器研究会)

(20) 亀井氏は、『室町期の貿易陶磁器』の中で、青磁碗の口縁端部外面の雷文帯（ヘラ描の例）をＡ～Ｄの４つに分類している。

亀井氏は、人形手茶碗とＡタイプの手描きの雷文を施す青磁碗が、時間的には平行して存在する可能性はあるとしている。

亀井氏は、ヘラ描の雷文帯についてはくわしく分析しているが、スタンプの雷文帯については、あまり触れていない。

雷文帯の形式については、本論と特に関係がないので、検討していない。

(21) 註(19)による。

(22) 上野俊雄　『堺環濠都市遺跡発掘調査報告―ＳＫＴ60地点―、―ＳＫＴ75地点』(堺市文化財調査報告第21集　堺文教育委員会1985、3)

(23) この人形手茶碗は、形は他のものと似ているが、見込みにスタンプがあるなど、特殊な例といえる。

(24) 上野俊雄　註(22)

(25) 註(3)による。

(26) 井上喜久男　『美濃大型編年図表』(日本やきもの集成　３、平凡社1980) 大窯編年Ⅰ期は、16世紀末から15世紀前葉の時期

(27) 註(4)による。亀井氏は、Ｂ―２類の生産は15世紀中葉を遡らないとしている。

(28) 註(4)参照

(29) 註(4)参照

(30) 窪田雅秀　『根来寺坊院跡（ＮＧ86）出土の中国陶磁―人形手青磁等根来寺初例のものについて―』(貿易陶磁研究No８、日本貿易陶磁研究会1988)

(31) 註(4)参照

(32) 葛野泰樹・三宅弘・稲垣正宏『妙楽寺Ⅲ』(滋賀県教育委員会　1988)

(33) 井上喜久男　『瀬戸・美濃の近世への変容について』(貿易陶磁研究No７、、日本貿易陶磁研

究会1987)

(34) 註(5)『百碗の周辺』

(35) 高橋箒庵（1861～1937）が編集した名物茶道具の写真入全集。

(36) 千少庵（1546～1614）千利休の次男、後妻宗恩の連れ子。桃山～江戸初期の茶人『茶道人名事典』

(37) 千宗旦（1578～1658）千少庵の長男、利休の孫、千家三世。『茶道人名事典』

(38) 千宗左・原叟宗左・覚々斎（1677～1730）表千家６世。『茶道人名事典』

(39) 遠州流２世。江戸初期の茶人『茶道人名事典』

(40) 註(5)『百碗の周辺』

(41) 註(10)参照

(42)(43) 山上宗二記（天正16～18年にかけて成立したとされる）によると、

「珠光茶碗は、千宗易により三好実休、薩摩屋宗訥、織田信長と伝わり本能寺の変で焼失した。」とある。珠光茶碗は十碗あったという記録もある。

松本茶碗は、珠光の弟子松本珠報が所持していたという由来のある茶碗で「宗二記」によると、やはり、「本能寺の変の時に焼失した」ようである。

筒井紘一『詳解　山上宗二記』

(44) 森村健一　『ＳＫＴ３地点』（堺市文化財調査報告第15集　堺市教育委員会1983）

(45) 註(30)参照

(46) 伝世品の井戸茶碗　「三芳野」（茶碗百佳撰　根津美術館）などは、特によく似ている。

(47) 林屋晴三　『茶碗変遷資料』（東京国立博物館紀要　第５号　昭和49年度）を参項文献として用いた。

(48) 赤沼多佳　『茶の湯と高麗茶碗』（高麗茶碗　茶道資料館　1989）

(49) 筒井紘一　『詳解　山上宗二記』

編集後記

本号には８編の論考を掲載することができました。職員の頑張りに頭が下がる思いです。ただ、少し気になることは、既刊寄稿者が多いということです。次号への課題といたしたいと思います。

翌年度は協会設立20周年。さらなる充実を期し、思いを新たにして出発いたします。今後ともご協力のほど、宜しくお願いします。　（普及啓発事業担当）

平成２年３月

紀　要　第３号

編集・発行　財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48－9780・9781

印　　刷　大津紙業写真印刷株式会社
大津市月輪一丁目９－33
TEL(0775)44－0190(代)